

ランスの粹も味わい、ヨーロッパを後に香港経由で帰国。

編集者から“子育てしつゝ一人で行けたのは？”との難問を出されたが、ママを出してやろうという家族の理解、三人の子供達の大きな特製夏休みカレンダー、そして自分の決断ということになるのだろう。出かける迄は長く感じた23日、でも地理を学んだ者として、自分の目で見、身体で感じることの大切さを改めて痛感する実り多い旅であった。

(8回生)

青 葉 城 下 私 誌

鈴 木 陽 子

仙台に移り住んでこの3月で2年になる。生来東京ぐらしの私にとって、初めての地方都市での生活は、何事も東京と比較してしまいがちだが、色々と興味深い。そこで主婦の眼から見た仙台の一面について、感じたことを少し述べてみたい。

周知の通り仙台は伊達62万石の城下町として栄え、明治以降も東京に次ぐ都市として、第二高等学校、第二師団司令部などが早くから設置されて、学都・軍都として発展した。しかしその後日本の工業化の進行につれて、小規模の伝統産業以外工業生産でみるべきものがないまま、市の発展は停滞し、相対的地位は低下した。最近においても、同規模の都市として共に政令指定都市への運動をしてきた札幌・広島などにも取り残され、人口66.5万(1980年国勢調査)ではまだ道はほど遠く、単なる地方中心都市に留まっているといえる。

仙台市の性格を一言で表わせば「支店経済の町」と言える。仙台支店或いは東北支店といった、仙台へ進出している企業の出先機関は約4,000あり、一事業所当りの雇用者数平均が28人という。大ざっぱな計算として、その雇用者1人が平均3人家族としても支店関係人口だけで33万人を越えることになり、市の人口の半数に達してしまう。勿論このなかには仙台周辺の市町村に住む人も多いだろうし、単身赴任者も又相当多いので、だいたい割り引いて考えなければならないが、いかに仙台の町が支店経済に支えられているのかは推察出来よう。従ってそこに働く人間の何割かはいわゆる転勤族ということになる。人口移動の激しさは、春の転勤シーズンの仙台駅頭や市役所住民課の混雑からも伺える。

市の産業別人口構成をみると、7割が第3次産業であり、なかでも不動産業の増加が著しいものなるほどと肯ける。転勤族は大部分中心地に比較的近いマンション、貸家、社宅に住んでいるが、これはかつての武家屋敷が居住人口の割に広がった為に、邸内に貸家を建てたり或いはマンション、社宅に建て変ったりして、流入人口を受け入れているからである。又、支店の本店所在地をみると6割が東京であり、物心共東京指向というか、東京との結びつきが非常に強い。今は日本全国どここの地方都市へ行っても、「東京の名店」は沢山出店しているけれど、ラジオ・テレビの天気予報で東京地方の天気までいうのにはびっくりした。

転勤族にとって仙台は非常に住みやすい。仲間が多いし、地元民にしても転勤族が珍しくないから扱いに慣れているというか、容易に受け入れやすい。

東京と比較しても、町はそんなに広くはないし、交通渋滞も東京ほどではないので町の中心商店

街へも近く、極上のものを求めない限りはだいたい間に合うので、買い物はかえって便利である。但し物価は不動産等ごく一部を除いて、地方都市だからといって安くはない。全国の都市で高い方から第5位という統計もある。生鮮食品でみると、県内産のものは安い、県外のものが高い。東京では流通システムが東京へ集中するように出来ている為か案外何でも安く買えるのだとこちらへ来て気がついた次第である。気候的条件―特に冬の寒さと降雪（1月の平均最高気温5.1℃、東京9.4℃）―と文化的施設、催し物の少なさ（例外は大学とテレビ局。四年制大学は8校、テレビ局は民放4局あるが、人口比で言うとどちらもいかにも多すぎる気がする。）を除けば、概ね東京の生活と変わりなく、日常仙台らしさといったものをあまり感じることはない。

しかし東京と同じ生活とはいったい何だろう。どこへ行っても画一的な生活を求めているのは我々通勤族ではないか。その為それぞれの地方の独自性とか郷土色といったものが失われて来ているのではないかという気もする。特に仙台の場合東京指向が著しいのだが、これは東北人の消極性、忍従性、或いは歴史的な中央権力に対する隷属性などによるところもあるような気がして少々淋しい。

（14回生）

イギリス便り

西岡陽子

夫の仕事の都合でイギリスに来て早や5か月。家々の窓辺に飾られたクリスマスツリーがとてもきれいだ。道行く人の目を楽しませよう道路側の部屋に置かれていて、カーテンをあけてある家も稀ではない。この付近はイギリスでも最も美しい地方の一つといわれ南イングランド特有のなだらかな美しい田園地帯に歴史ある町や村が点在している。ここゴードミングもそんな町の一つ。ロンドンの中心から南西に約50km、人口2万人足らずの小さな町である。そこかしこに築後200年、300年という黒い柱と白壁の建物が残り、今住んでいる家も80年以上も前のものという。家々のレンガと屋根のスレートは渋い色で、周囲の冬でも青々とした牧草地や森によく調和し、落ち着いた雰囲気をかもしだしている。

人々はとても人なつこく、道で目が会うとニコリ微笑む。特に11か月の息子連れて歩いていると必ずといってよいほど何人かがあやしてくれる。バスを待つ間にも知らない者同志がおしゃべりを始めている。また「サンキュー」が頻繁に発せられ人々の気持ちをなごやかにしてくれる。大学の先生も多くが、毎回講義の終わりに「サンキュー」という。窓口で切符を買うと駅員が「サンキュー」、釣り銭を受け取ったお客も「サンキュー」、出札口で切符を見せるとまた「サンキュー」という具合。バスの乗客が降り際、運転手に「サンキュー」と挨拶したりする。声の調子が軽快で、聞いていて実に気分がいい。気をつけてみると、母親がまだ言葉を話せないほんの小さな子供に「サンキュー、マミー」と言って教えている。幼い時からしつけられるのだろう。

まだ、夫婦が生活の単位として確立している感じを強く受ける。野原の散策もスーパーの買い物も夫婦連れが圧倒的に多い。そしてその仲の良いこと。年代を限らず腕を組んでいる。中学生の子を持